身体拘束について知っていただきたいこと

当院は身体拘束最小化に取り組んでいます

患者の皆さまへ

入院中であっても患者の皆さまがその人らしく、また、皆さまの希望を最大限に尊重し、治療や看護を提供していきます。入院生活は、生活環境が変化し、今までの日常生活と比べ制限が生じることから、ストレスが生じやすいと言われ、治療や身体回復の妨げとなることがあります。入院中に起こり得ることやそれに対しての対応についてご紹介しますので、ご理解とご協力をよろしくお願い致します。

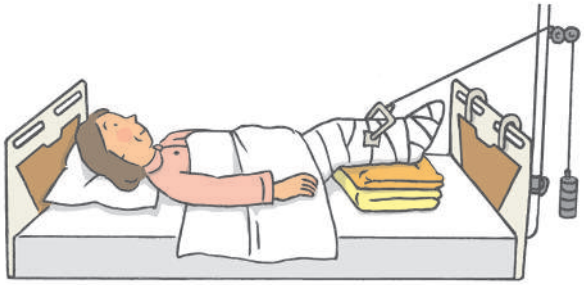
北　里　大　学　病　院

入院中に起こり得ること

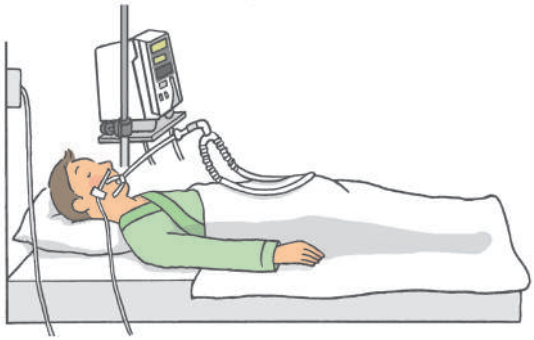
現在抱えている病気による症状や治療による安静の影響などが加わり、眠れない、時間や場所がわからず混乱してしまうなどの症状が出現することがあります。その際、治療上必要な安静を保持することができず、無意識に治療上必要な管を抜いてしまうなどの意図しない行動を起こしてしまうこともあります。これは、全ての患者さんに起こり得ます。

環境の変化による影響

不眠


安静で動けない

薬による副作用


手術後の管理

上記影響から生じる意図しない行動

混乱の出現

不眠によるふらつき

治療上必要な管の抜去

必要な安静が守れない

このような行動は、患者さんの本来の入院目的である治療や検査などに影響を与えるだけでなく、新たに別の辛さが生じたりすることにつながります。

患者さんの入院目的が達成できるように

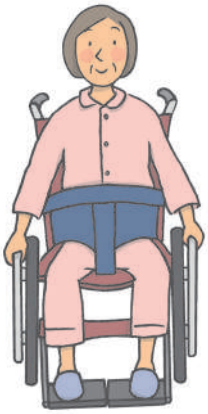
入院目的が達成できるよう私たち医療者は、患者さんやご家族と予防を含めた対応をともに考え実施します。

患者さん、ご家族の希望を聞きます　入院生活のメリハリがつくよう日時等のお声掛けをします　お薬を使って眠れるように調整します　必要な管が抜けないように観察します

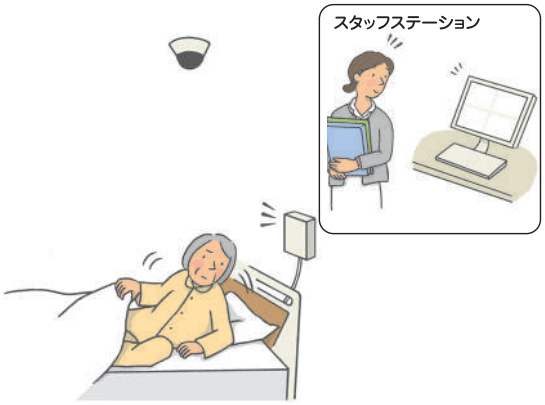
これらの予防や対応を実施しても治療上必要な安静が保持できない、無意識に必要な管などを抜いてしまうなど、患者さんの意図しない行動が病状に大きな影響を及ぼすと複数の医療者が判断した場合は、患者さんの行動を意図的に制限することがあります。これを「身体拘束」と言います。

身体拘束の目的と方法

●ベッドや車椅子などからの転倒転落防止、安静保持目的

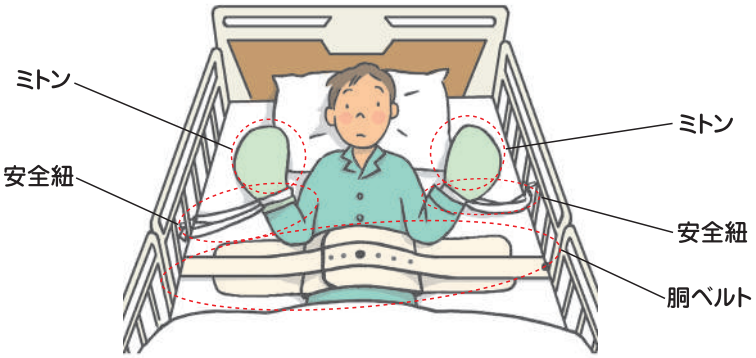


車椅子安全ベルト



離床センサー、監視カメラ

●患者さんの治療や検査上、必要な管や点滴ルートに触れない、抜かない目的



胴ベルト、紐を使用した安全管理

身体拘束を最小化するために実施していること

1. 身体拘束実施が予測されるまたは必要な場合は、「説明文書」に基づき説明をさせて頂き、患者さんご家族の意思を確認させて頂きます。
2. 身体拘束を実施する場合の期間は、最少となるよう、医療者で話し合っています。
3. 身体拘束以外の代替え手段がないか、医療者で検討を行っています。

北里大学病院は、身体拘束最小化について考えるワーキンググループがあります。常に最新の知識を持って検討をしていますので、何かお気づきの点などありましたら、医師・看護師などにお声かけ下さい。

編集発行:北里大学病院 リスクマネジメント委員会
身体拘束最小化ワーキンググループ
発行月:2022年4月